

障害者のきょうだいの時間的展望に関する研究 —親の養育態度の違いに着目して—

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻
2017M30003 長野 夏海

要旨

本研究の目的は、(1) 障害児・者の兄弟姉妹（以下、「きょうだい」とする）と障害児・者本人（以下、「同胞」とする）との関係性の変化のきっかけとなった出来事を明らかにすること、(2) その変化の要因を明らかにすること、以上2点である。

竜野・山中（2016）によれば、障害児と共に生活する家族、特に親の直面する課題についての研究は1980年ごろから盛り上がり始め、きょうだいについての研究は、1990年代から親についての研究を追うように本格的に開始された。三原（2000）によれば、きょうだいは健常児の兄弟姉妹にはない特有の悩みを持っており、きょうだいの抱える困難やその背景について様々な研究が行われるようになった。近年では、きょうだいの抱える困難の多様な要因をより詳しく調べていくために、半構造化面接といった質的な研究方法が用いられるようになり、長澤・桂川・菅野（2009）はきょうだいは各発達段階において、同胞への理解や捉え方が変化することを明らかにし、笠田（2013）はきょうだいのライフコース選択のプロセスを示すとともに、選択の際に葛藤の解決や維持に影響を及ぼしている要因について明らかにした。この2つの先行研究より、きょうだいと同胞の関係性（本研究において、「相手に対する認知と、相手をどう感じ取っているか」という主観的な情動を含めたもの」とする）は人生において変化し、その変化はライフイベント；人間の一生において節目となる出来事（出生、入学、卒業、就職、結婚、出産、育児、退職、親の介護、親との死別等）が何らかのきっかけとなっているのではないかと考えられる。

18歳から55歳のきょうだい男女6名の研究協力者を対象に、個別に半構造化面接を行った。インタビューの内容は、協力者の簡単なプロフィールと同胞の障害、年齢、続柄等を記入していただいた後、就学前のころから現在まで、過去から遡って語っていただいた。語りの所々で協力者が過去抱いていた、あるいは現在抱いている同胞、親、友人に対する感情や過去、現在の家族における自分の立ち位置、将来の展望を尋ねた。また、同胞の障害について認識した時について、きっかけや誰からどのように教えてもらったか等を含めて質問した。インタビュー内容はICレコーダーにより録音し、それを筆者が逐語録に書き起こした。

インタビューの内容より、同胞に対する感情が現在まで大きく変化していないきょうだいと変化してきたきょうだいに分かれた。同胞に抱く感情が変化してきた協力者について、協力者BとCは、マイナスの関係性からプラスの関係性へ変化し、協力者Eは、プラスの関係

性からニュートラルな関係性へと変化したと考えられる。その際、同胞に対する感情の変化のきっかけが、家族の一員である同胞が家を離れる【同胞の施設入所】、きょうだい自身の新たな生活の始まりである【高校進学】や【結婚】といったライフイベントにあることが推測された。同胞に対する感情が変化すると、同胞に対する認知も変化することから、ライフイベントがきょうだいと同胞との関係性に変化を与えたと考えられる。

同胞との関係性が変化したきょうだいと変化しなかったきょうだいとは、同胞の障害についての親からの説明の有無、原家族における立ち位置と進路選択、親亡き後への使命感、以上3点に違いが見受けられる。ここから、きょうだいと同胞との関係性の変化の要因として、親からきょうだいへの支援者役割への期待の有無や親のきょうだいに対する見方といった親の養育態度が考えられる。研究協力者の語りを参考に親の養育態度別にきょうだいを以下の4つに分類した。①支援者役割期待無し、個を尊重：同胞との関係性の変化がなく、親へプラスの感情を持ち、将来は自らのキャリアプランを持っている。②支援者役割期待無し、同胞と比較：同胞との関係性の変化がなく、親へマイナスの感情を持ち、将来は自らのキャリアプランを持っている。③支援者役割期待有り、同胞と比較：同胞との関係性の変化が有り、親へマイナスの感情を持ち、親亡き後の不安を感じている（本研究における研究協力者には該当者がいなかったため、特徴を推測）。④支援者役割期待有り、個を尊重：同胞との関係性の変化が有り、親へプラスの感情を持ち、親亡き後の不安を感じている。

本研究の結果、きょうだいと同胞との関係性の変化の要因として親の養育態度が考えられ、その変化はライフイベントをきっかけとして起こることが明らかになった。よって、きょうだいの人生において、同胞の存在やその関係性からの影響は無視できないが、同胞はあくまで媒介であり、親がきょうだいをどう見ているか、親が将来の展望をどう捉えているかがきょうだいの人生に反映される可能性が高いと考えられる。

本研究の課題として、本研究は回想的に語られた内容を基に行ったことから、現在の研究協力者によるバイアスがかかっていた可能性が考えられる。親の養育態度について、本研究においてはきょうだいの語りから考察した。よって、様々な世代のきょうだいやきょうだいの親にも同様に話を伺い、考察する必要があると考える。また、今回の研究協力者には、本研究で行った分類における③支援者役割期待有り、同胞と比較：同胞との関係性の変化が有り、親へマイナスの感情を持ち、親亡き後の不安を感じている、に該当する者がいなかった。より多くのきょうだいにインタビューを行い、分類③に該当する兄弟が存在するのかを確かめる必要がある。